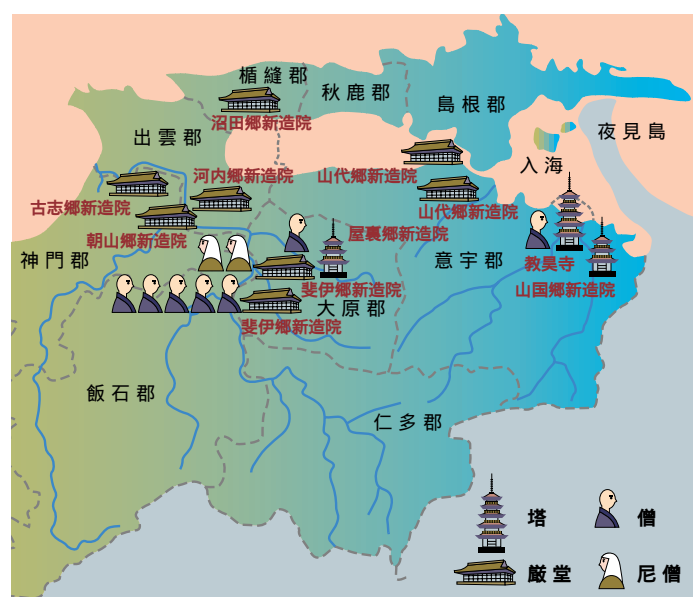


『出雲国風土記』に書かれたお寺

「教皇寺」と一〇カ所の「新造院」

奈良時代に編纂された地誌『風土記』は、全国の国ごとに作られたはずですが、現存する『風土記』は、わずか五カ国分だけで、しかも完全にすべての内容が保存されているのは、『出雲国風土記』以下、「風土記」とするだけです。「風土記」に出てくる寺院関係の内容としては、「教皇寺」と一〇カ所の新造院に関する記述が見られます。新造院とは寺のことを指していると考えられ、「風土記」の書かれた八世紀前半には、出雲国に二一カ所のお寺があったと考えられています。



『出雲国風土記』に書かれたお寺の分布図

僧のいない寺、建物のない寺？

「風土記」を読むと、教皇寺は、五層の塔を建つ、山代郷新造院では、殿堂を建つとあり、いずれの新造院についても建物は一つしか書かれていません。古代寺院の多くは、七堂伽藍塔、金堂など寺に備えられているさまざまな建物を備えた大規模な施設だったと考えられるのが一般的です。

さらに読み進んでいくと、山代郷新造院の部分には、「僧なし」と書かれていたり、古志郷新造院には、「本、殿堂を建つ」とも殿堂が建つていたと書かれていたりします。建物のない寺院や、僧侶のいない寺院とは、いったいどのような寺院だったのでしょうか。

当時の仏教寺院の土地には税を減免する制度があり、税金対策として建物だけを建立する例もあったようです。そこから想像すると、建物が一つしかなかったり、建物がなくても寺院と言っていたり、僧がいない寺院があったりするものも少なからずあると考えられます。

山代郷新造院の一つに考えられている松江市の四王寺跡は、一九八五年に発掘調査が行われました。この新造院は、殿堂を建つとだけ書かれていましたが、調査では礎石を持つ立派な建物のほか、掘立柱建物や、建物の間をつなぐ回廊と思われる施設も発見されました。「風土記」の記載は、その寺院にある中心的な建物を記載したものであってもいいかもしれません。



銅造誕生釈迦仏立像 (浜田市国分町・石見国分寺跡)

1988年に行われた発掘調査により発見された。頭部と両手の先、台座の部分を欠いているが、ひねりを加えた腰つきに躍動感が見られる。

浜田市教育委員会が中心となって行った石見国分寺の発掘調査では、銅造誕生釈迦仏が発見された。現在、寺台にあり、現在は寺跡の中心部と考えられる位置に金蔵寺が建てられています。

金色に輝く釈迦仏が発見された石見国分寺

出雲国分寺跡の発掘調査で発見された瓦は、朝鮮半島にある新羅の影響を受けたと言われるもので、非常に細かく繊細な文様を持っています。



出雲国分寺の瓦

島根に建てられた国分寺 華開く国家仏教

美しい瓦を持つ出雲国分寺

松江市の出雲国分寺跡は、一九五五年・五六年などに発掘調査が行われ、古代寺院としては、その全容がほぼ解明された県内唯一の寺跡です。方五〇〇尺(約一五〇メートル四方)の寺域を有し、塔・金堂・僧坊などのほか、多くの堂塔を備えています。また寺の入口にあたる南門から、一直線に石敷き道路が延びています。この道路は天平古道と呼ばれ、国分寺跡とともに国の史跡に指定されています。

意宇郡 教皇寺。舍人郷の中にあり。郡家の正東二十五里一百二十歩なり。五層の塔を建立す。僧有り。教皇僧が造りし所なり。散位天初位下上頭首押猪が祖父なり。

新造院 一所。山代郷の中にあり。郡家の西北四里三百歩なり。殿堂を建立す。僧なし。日置君目利が造りし所なり。出雲籍戸の日置君麻呂が祖父なり。

新造院 一所。山代郷の中にあり。郡家の西北一里なり。殿堂を建立す。住める僧、一殿有り。飯石郡の少領、出雲臣弟山が造りし所なり。

新造院 一所。山國郷の中にあり。郡家の東南三十一里一百二十歩なり。三層の塔を建立す。山國郷の人、日置部根緒が造りし所なり。

新造院 一所。沼田郷の中にあり。殿堂を建立す。郡家の正西六里一百六十歩なり。大領出雲臣大田が造れる所なり。

出雲郡 新造院 一所。河内郷の中にあり。殿堂を建立す。郡家の正南一十三里一百歩なり。旧の大領日置部臣布禰が造りし所なり。今の大領佐底麻呂が祖父なり。

神門郡 新造院 一所。朝山郷の中にあり。郡家の正東二里六十歩なり。殿堂を建立す。神門臣等が造りし所なり。

新造院 一所。古志郷の中にあり。郡家の東南一里なり。刑部臣等が造りし所なり。本、殿堂を建立す。

大原郡 新造院 一所。斐伊郷の中にあり。郡家の正南一里なり。殿堂を建立す。僧五殿あり。大領勝部臣蟲麻呂が造りし所なり。

新造院 一所。屋裏郷の中にあり。郡家の東北一十一里一百二十歩なり。層塔を建立す。僧一殿あり。前の少領額田部臣押嶋が造る所なり。今の少領伊去美が従父兄なり。

新造院 一所。斐伊郷の中にあり。郡家の東北一里なり。殿堂を建立す。尼殿あり。斐伊郷の人、櫛印支知麻呂が造る所なり。

(『校注出雲国風土記』より)

ています。誕生釈迦仏とは釈迦が生まれた直後、七歩歩いて天を指さし、「天上天下唯我独尊」と言ったことに由来する仏像です。残念ながら台座や頭部を欠いていますが、天を指している情景が美しく表現されています。

この仏像は、美術研究者によれば、国分寺が造られる奈良時代後半よりも古い時期の仏像と考えられており、石見国分寺が造られる以前に、この地に寺が存在した可能性も指摘されています。

平安舞踊を今に伝える隠岐国分寺

日本海に浮かぶ隠岐島は、古代においては一つの行政区画として独立した存在でした。西郷町には現在でも、隠岐国分寺が寺としての機能を有して残っています。発掘調査は行われていませんが、境内に古い礎石が残されており、古代に造られたものかもしれません。

この寺の最大の注目点は、毎年四月に行われる「蓮華会舞」です。蓮華会舞は平安舞踊で、外国(南アジアか?)に起源を有すると言われる伎楽の姿を今に伝える貴重な芸能です。隠岐国分寺は、中世には島流しにされた後醍醐天皇の御在所として利用されるなど、流人の島としてのドラマも残されています。



蓮華会舞(西郷町池田・隠岐国分寺) 蓮華会とは「蓮華の花の咲くところに行う法会」の意味で、旧暦6月15日の行事であったが、現在は4月21日に行われている。平安舞踊を現代に伝えるものとして多くの見学者が訪れる。使用される独特の面は県指定文化財。



四王寺跡の発掘調査風景(松江山市山代町) この四王寺跡は、山代郷南新造院に比定されている。1984年からの発掘調査では、複数の建物跡が見つかった。

教皇僧はどのような僧か？

古代では、僧侶になるために、資格が必要でした。その資格は、戒壇という施設で授けられるわけですが、日本では長い間戒壇が設けられませんでした。日本に戒壇が設けられたのは、鑑真が日本にやってきた奈良時代終りになつてからのことです。古代では僧侶は佛法をもつて国に奉仕する者と考えられており、厚く保護されていたため、そうした保護を自当りに勝手に僧侶を名乗る私度僧が出没するようになりました。こうした私度僧をなくすため、七二〇年に日本での僧侶の公的証明書である公験が発行されます。「風土記」が編纂されたのは七三三年の事ですから、ちょうど私度僧が問題になっている渦中のことになります。「風土記」の記載によると少なくとも七人の僧と二人の尼がいる事になっていますが、はたして、全員が資格を受けた僧侶だったのでしょうか。「風土記」記載の新造院の記事そのものの解釈にもさまざまな説があり、実態は謎に包まれています。